

## 学生の「ゆとり教育トラウマ」とどう切り結ぶか？

### —2011 年度後期「教育課程論Ⅱ」における試み—

佐藤 年明

本稿を含む一連の教育実践研究「学生の『ゆとり教育トラウマ』からの脱却を支援する学習指導方略の開発」に対し、平成23年度三重大学教育G Pによる補助（20万円）を受けた。

#### 1. 2011 年度後期「教育課程論Ⅱ」における「ゆとり教育」に関する学習課題(1)

筆者が担当する教職科目授業においていわゆる「ゆとり教育」問題を学習課題としたのは、2010 年度前期「教育課程論Ⅰ」（2コマ）が最初であり、その後2011 年度前期「教育課程論Ⅰ」（2コマ）、同後期「教育課程論Ⅱ」（3コマ）でも継続して取り上げてきている。

このうち、2010 年度前期および2011 年度前期「教育課程論Ⅰ」の実践過程と分析については、拙稿「いわゆる『ゆとり教育』に対する学生の認識の検討」（『三重大学教育学部研究紀要』第63巻(教育科学)2012年）において報告した。本稿では2012 年度後期「教育課程論Ⅱ」に関して報告する。

なお、本学部における「教育課程の意義及び編成」領域の授業については、文部科学省の指導により小学校対象の授業と中学校・高等学校対象の授業を分離開講することとなり、2011 年度より前期開講の「教育課程論Ⅰ」で小学校教育課程、後期開講の「教育課程論Ⅱ」で中学校・高等学校教育課程を取り上げることとした。

いわゆる「ゆとり教育」問題に関する学習には、2010 年度前期では1回の授業、2011 年度前期では2回の授業、そして2011 年度後期の授業では3回の授業を費やした（教育課程全般について取り扱う授業としてはこの程度までが限界である）。

さて、2011 年度後期授業では、まず以下のような課題を提起した。

第6回授業（2011.11.11）

〔班討論⑤〕学校生活におけるゆとりとは何か？

- a. 児童生徒の立場から見て、ゆとりがある学校生活とは具体的にどのような状態のことなのか、思いつく限り列举してみよう（ナンバリングする）。
- b. 教師の立場から見て、aで挙げた各項目は、指導上望ましいことなのか、望ましくないことなのかを話し合おう（両論ある時は併記する）。

〔課題レポートNo.6〕上記aであげたようなゆとりが自分自身の中学校・高校時代に実際にあったかどうかを点検してみよう。まず「中学校20xx年-20xx年・高校20xx年-20xx年」と記載し、次に点検結果を書く。班で挙げた項目についてチェックしてもよいし（但し、単に項目番号を挙げるだけに終わってはダメ）、重点を絞って記憶していることを詳しく書いてもよい。

これは2011 年度前期授業のいわゆる「ゆとり教育」問題学習の2回目で提起した課題とほぼ同じである。前期はこの課題の前にいわゆる「ゆとり教育」という言葉に関する情報源とその内容、「ゆとり教育」という言葉に対して学生が抱く印象などを問いかけているが、後期では省略した。被教育体験の中で記憶がある「ゆとり教育」について、大方の学生がマイナス印象を持っていることは前期でわかったので、「ゆとり教育」という言葉に対して抱く印象よりも、学生が考える学校教育のあるべき姿と現実の姿の対比に重点を置いて学習課題を提起した。

すなわち、前期授業の問いかけで成功しなかった（意味が正確に伝わらなかった）〈〈理想としてのゆとり〉〉についてまず最初に問いかけ、次にその理想が学校教育の現実の中に存在したのかどうかを問うた。

「ゆとり教育」は、論者により異なるけれども主として2000 年代教育課程（1998-99 年版学習指導要領に基づく）を指して使われる呼称であり、ごく一部の論者を除き批判的・否定的意味合いで取り上げられている。主要な論点はこの教育課程を実施した結果「学力低下」が起こったということである。

こうした批判の問題点の第1は、「ゆとり教育」という命名によってあたかもこの時期の教育課程には「ゆとり」があったかのような誤解を生じさせることであり、第2はそのゆとりある教育課程のせいで学力が低下したのだという神話を創りあげたことである。こうした攻撃はいずれも学校教育課程の実態そのものから目を逸らす役割を果たしている。

そこで、今期授業における問いかけは、まずいわゆる「ゆとり教育」に関する世間の風評から入るのではなく、学生自身が持っている教育理想の中で、学校生活がゆとりを持って展開されるということがどう価値付けされているかをさぐることからスタートした。但し、学校教育において

子どもがほしいと思うゆとりと、それを教師がどう見るかは別問題であるので、教師をめざす学生たちに教師の視点から学校生活のゆとりを考えさせることも付け加えた。

この第6回授業における班討論⑤と課題レポート No. 6の集約結果については、量が膨大であるので、本稿には収録しきれないため、以下のホームページ上に掲載した。

<http://www.cc.mie-u.ac.jp/~tsatou/leftsidemenu/yutori/20111111Q&A>

## 2. 2011 年度後期「教育課程論Ⅱ」における「ゆとり教育」に関する学習課題(2)

2011 年度前期授業までに取り組めていなかった課題として、「ゆとり教育」批判論者たちの言説に当事者世代の学生たちを対面させることがあった。今期授業では「ゆとり教育」における学力低下を激しく非難する和田秀樹と、「ゆとり世代」は企業社会に適応できないと警告を発する柘植智幸の言説を検討させた。資料を事前配付すればもう少し余裕もあったのだが、筆者の準備が遅くて授業当日に両資料抜粋を配付し、授業中に和田の資料を検討して討論し、授業後に柘植の資料を検討してレポートを書くという慌ただしい学習となった。

第7回授業 (2011. 11. 18)

※資料⑬⑭に関する佐藤の説明

資料⑬ (和田秀樹『「ゆとり教育」から我が子を救う方法』(東京書籍2002. 10抜粋)は第7 (8) 期学習指導要領に基づく教育課程が全面実施された2002年に出版されています。和田秀樹氏は精神科医ですが、受験指導のプロで塾経営もしている人。「ゆとり教育」批判の主張をあちこちで展開してきた人です。

資料⑭ (柘植智幸『「ゆとり教育世代」の恐怖』(PHP研究所 2008. 2) 抜粋) は、著者の柘植氏に寄れば「ゆとり教育世代」の高校生がすでに2006年度に卒業し、さらに2010年度には「ゆとり教育世代」の大学卒業生が出る、という時期に書かれました。柘植氏は学生の就職支援や企業の人材養成を担当する会社の経営者で、タイトルの通り「ゆとり教育世代」が社会に出て来ると企業にとっては大変なことになると危機感を煽り、しかし「最後はゆとり教育世代」に期待していると締めくくっています。

これらの資料を、一般的に学習するのではなく、俗称「ゆとり教育」を経験してきた世代の一人としてどう受けとめるか、という視点から読んでいってほしいのです。

[班報告⑥]資料⑬で和田氏が予見している第7 (8) 期学習指導要領に基づく教育課程 (俗称「ゆとり教育」) の特徴、特に子どもたちの学習がどうなっていくかについてのコメントを、この時期に教育を受けた当事者としてどう見るかについて、班で意見を交流する (班で意見を一致させる必要は

ない。異論が出た場合には併記すること)。

[課題レポートNo. 7]資料⑭で柘植氏が「ゆとり教育世代」について述べていることに対し、「ゆとり教育世代」と呼ばれた当事者の一人として応える。

班報告⑥の事例を1例挙げる。

- ・「将来不幸になる人々」をつくりあげる→そうとは言い切れない。落ちこぼれ (学力の低い人) =不幸になるとは限らない。人の幸・不幸はその人自身が決めるものである。
- ・カリキュラムの削減によって考える力を鍛えるトレーニングが大幅に消えた→1万円計算の例が出ていたが、3桁までしっかり理解していれば、あとは応用で解ける。本当の意味で基礎知識が付いていれば、それを応用するので、考える力は十分鍛えられる。カリキュラムの削減が思考力の低下に直結すると考えるのはおかしい。
- ・総合学習で子どもの自主性や意欲を伸ばし、主体的に取り組む態度を育てることはできない→確かにその通りだと思う。総合学習でやる内容が、生徒の興味があるものではなく、結局は教師からの押し付けであるから。
- ・子どもたちが教育を受ける機会を奪っている→確かにそう思う。学ぶことが多いほうが、選択肢が広がって、好きになることが多い。
- ・授業削減で子どもたちが素朴な疑問を抱いても、教えることができない。わからないものをわかるようにするための勉強ができなくなる。→そんなことはない。本当にわからないものがあれば生徒は直接聞きに行くし、直接聞きに行けば先生も教えてくれる。(5コマ6班)

この班は和田秀樹の「ゆとり教育」批判に対して是是非非の立場でそれぞれの批判内容に則して判断を下しているが、次世代に関することとしての「学力低下」を、そう言われても仕方ないものと受けとめる意見も多かった。

課題レポート No. 7 の事例を2例挙げる。

- ◎ゆとり教育を受けてきた私たちの世代は、わがまま勝手に仕事ができず、常識が身についていない、などと言われることが多い。

しかし、ゆとり教育を受けても、そのような結果に関連するとは思えない。「この世代はゆとりである」という先入観で、決めつけられているような気がする。たとえそうでなくても、ゆとり教育は私たちが望んだものではなく、大人が決めたことであり、その世代の人たちは、私たちのことを「ゆとり」だと切り捨ててのではなく、自分たちの問題でもあるという考えも持ってほしいと思う。(4コマ1班)

- ◎ゆとり世代は精神的な脆さがあるという指摘に対して、私はその世代として否定も肯定もできない。

あるいは他の世代に生まれていたとして、自分たちが精神的に強固であると言い切れるわけでもなく、つまりは当事者として答えるにはこの課題は曖昧すぎるからだ。

しかしながら、現在 19 歳である私自身とその周囲の同世代に限って言わせていただくなれば、けして将来に対して甘い見解を持っているわけでも逃げの姿勢を取っているとも思わない。

学校の勉強についていけなかったり、そもそも学校という環境に馴染めず非行に走ってしまう友人が居なかったとも思わないが、それはゆとり教育が行われていたからだとも思わない。確かに週休二日制になったし、授業内容が削減される時代に小中と学んで来はしたが、授業がまったくもってつまらなかったわけでもないし、日々退屈だったわけでもなかった。

私たちの世代はまだ“モンスターペアレント”なんていう言葉がまだ浸透していない時代だったし、学業以上に心身を追う部活動もあった。

資料に書かれていることに一点反論するならば、学業以外においても私たちは競争の場におかれることは多かった世代である。

しかし、ゆとり世代とひとくくりにまとめる大人の側と、実際にそう呼ばれる若者の間に溝があるというのは確かだろう。

子供は、大人たちが思っているよりは物事を考えているし、挑戦したいという意志もある。現状を打破したいと、誰もがもがいている。

どうか、それを頭ごなしに“ゆとり世代だから駄目だ”という風に決めてかかることだけはやめてほしいと、ゆとり世代の一員として思う。

(3 コマ 5 班)

上記 2 例が学生の意見を代表するものであるとは言えないが、世代ごと丸めて否定的に評価されることへの反発はありながらも、有効な反論ができず弱々しい言明にとどまっている。「競争がなかったわけではない」という反論は他の学生からも聞かれたが、これはこれで「では競争があることがよいことなのか？」という問い直しをしていかなければならない。

### 3. 2011 年度後期「教育課程論Ⅱ」における「ゆとり教育」に関する学習課題(3)

第 7 回授業を終えて、客観的な事実認識を重視する立場から「ゆとり教育」言説を批判的に検討する作業がまだ不足していると考えた。

そこで、第 9 回授業で再度班作業による文献検討を指示した。

第 9 回授業 (2011. 12. 2)

[班報告⑦]

資料⑩：西村和雄編『学力低下と新指導要領』(岩波ブックレット 2001)

この文献は、俗称「ゆとり教育」が学力低下をもたらしたと激しく批判し、学習指導要領撤回要求運動まで組織した研究者グループの共同著書です。

これを各コマで分担して検討します。(中略)

本日の作業課題は、この資料全体の中から、メインの検討課題である「学力低下」に絞り込んで、事実を検証することです。

a. 担当した箇所の中で指摘されている「学力低下」の事実(誰の何が低下したのか/いつといつのデータを比べて低下と言っているのか、など)をピックアップする(量が多い場合は要約でよい)。

b. そのデータの出典(何年の何という調査か、何年発行の何という文献に収録されているか、など)

c. a の背後にあると思われる、書かれていない事実を推測する。

\*担当箇所に書かれている一つ一つのデータごとに、a・b・c の順で記述する。

[課題レポート No. 8]

班の検証の結果、資料⑩の分担箇所における「学力低下」の指摘は、全体的に妥当なものであったと考えるか？それとも不当なものだと考えるか？(その理由も)

第 7 回授業では文献に対する当事者世代としての感想を求めたのに対し、第 9 回授業では「ゆとり教育」批判言説に対するより客観的な検討を求めた。検討の過程が上記 a → b → c の 3 段階である。

まず書かれている事実そのものをピックアップさせる。学生は事実的な叙述をそのまま信用する傾向があるので、その事実の典拠が表示されているかどうかを確認させる。その後本来なら典拠が示された事実であってもそれが信頼に足る事実かどうかを証拠を集めて検証する必要があるが、その作業は授業の中では無理である。でも、典拠の確認で終わるわけにはいかない。そこで、書かれていることだけが事実ではないという立場から、意図的にか無意図的にかは別として書かれていない事実があるのではないかと推測させた。この部分で批判的な検討を期待したのである。

例えば、資料⑩の中に、以下のような叙述がある。「私たちの調査では、日本のトップの二つの私立大学 a と b の文系学部では、20%が小学校の分数や四則計算を間違え、70～80%の学生が二次方程式( $x^2 + 2x - 4 = 0$ )を解くことができませんでした。」(P. 7)

この一文にも、書かれていない事実が多く含まれている。

- ・どの大学について述べているかわからない。大学名が隠されていることにより読者は事実を検証することができない。
- ・「文系学部」とだけあるので、大学での学習において数学を必要とする分野なのかどうかを確認できない。
- ・当該学部の全学生を悉皆調査したのか、特定の学年の

全学生を調査したのか、それともサンプル調査なのかの確認できない。

少なくとも上記3点のような諸事実の補足がない限り、資料⑩の著者が指摘する「学力低下」が妥当な事実評価であるかどうか断定はできないということを学生諸君に気づかせたかった。

授業では資料⑩全文を6～9部分に分け、それぞれの部分を複数の班に検証させたのだが、3つのコマで上記の部分を担当した班の報告は以下の通りである（該当箇所を含む部分を担当したのは計6班であるが、該当箇所に言及したのは以下の2班のみであった）。

- a. 実施年不明
- b. 筆者
- c. ・私立大学は、受験方法が多様で少数の科目で受験できるため、文系ではたとえ数学や理科がわからなくても入学することは可能だから。
- ・3Kと言われた時代とは違って、学歴をそこまで重視していないような風潮がある。
- ・大学の数自体も増え、少子化の影響もあり、大学に入学するということが以前より容易になってきている。

（3コマ1班）

- a. 日本のトップの私立大学 a b の文系学部では、20%が小学校の分数や四則演算を間違え、70から80%が二次方程式を解くことができなかった。
- b. なし
- c. 過去のデータの比較がない。実際は、昔もさほど正答率が良くなかったのではないか。このデータだけでは、学力低下とは言えない。

（4コマ2班）

3コマ1班報告のcは、要求した「書かれていない事実の推測」ではなく、課題にきちんと応えたのは4コマ2班のみであった。

それぞれの事実群についてa・b・cを一連のものとして記述してほしいのに、それらをばらばらに記述するなど、この課題の趣旨を十分理解していない班報告も多かった。

上記班報告⑦を踏まえて書かせた課題レポート No. 8 の回答事例を2例挙げる。

◎班の検証結果における「学力低下」の指摘は全体的に見て、妥当なものだと考える。

このように考える理由は2つある。

まず1つ目は、具体的な数字が学力調査の結果に使われているからだ。調査に使われた教科自体は算数や数学に限られているが、同じ問題を使って、ある程度の年月をかけて調べられているため、比較もしやすくデータとしても確実性があると考えられる。

2つ目は、大学入試の科目の減少など、自分も実際体験してい

るからである。やはり今と昔では学ぶ範囲も異なり、内容も変わっていることは、身をもって感じる。

私たちが討論したところだけで、学力低下の全貌が明らかになるとは思っていないが、指摘した部分は確かに現実に起っていることなので、全体的に見て、妥当なものとは私は考える。

（3コマ1班）

◎私はここで書かれていた学力低下に対する指摘は全てとは言えないが不当なものだと考える。

まず決定的な裏付けがなく全体的に曖昧な表現が多く感じたからだ。

「ゆとり教育」という言葉を盾にしてしっかりしたデータもなく「学力低下」に結びつけているように思う。

疑問に思うのは「学力」とはそもそも何を指しているのか、そして「学力」は何をもってはかるのかということだ。

日本数学会が行なったアンケート調査も言っていることは理解できるが、果たしてそれは「ゆとり教育」が及ぼした結果なのかという根拠がない。

「ゆとり」という言葉に踊らされ、その主張を鵜呑みにしてしまふのは危険なことだと感じた。

（4コマ9班）

全体では、上記の第1の事例の類似意見＝「学力低下」の指摘は妥当と判断する者が54名、第2の事例の類似意見＝「学力低下」の指摘は妥当でないと判断する者が62名、どちらも言えない、あるいはどちらの面もあるという中間意見を述べる者が10名であった。数字で見れば批判的姿勢で文献を評価した学生の方が多い。しかし、事実を踏まえた批判の方法を十分獲得できていない学生が多いのが現状である。

#### 4. 学生の「ゆとり教育」意識への暫定的コメント

前期「教育課程論Ⅰ」における俗称「ゆとり教育」に関する学習では、批判に晒される俗称「ゆとり教育」がどのような事象を指して論じられていると当事者世代が意識しているのか、またそうした教育の結果＝自分たちの世代の資質であるとして揶揄的、批判的に論評されることをどう思うのかを学生に問いかけた。

世間の「ゆとり教育」論評という価値判断が好むと好まざるとに関わらず学生自身の自己規定の構成要因となっていることをまず自覚してほしかった。そして、俗称「ゆとり教育」の「ゆとり」という修飾語がホンモノなのかを問うことによって、世間の有力言説をそのまま受容した「自分たちは『ゆとり教育』の被害者」という消極的認識から、有力言説は正しいのか？という方向に学生の意識を向けたかった。

しかし、前期「教育課程論Ⅰ」では、有力な「ゆとり教育」言説そのものを学生が検討する作業を行なえていなかった。そこで後期「教育課程論Ⅱ」では、俗称「ゆとり教

育」についてとりあげた授業を3回の授業うち2回は「ゆとり教育」言説の検討に充てた。まず、「ゆとり教育」及び「ゆとり世代」を激しく非難した和田秀樹・柘植智幸の文献抜粋を読ませて、当事者世代の立場からこれらの批判をどう受けとめるかを議論させたが、この作業だけでは批判的検討が弱いと考え、次の回には「ゆとり教育」による学力低下を批判した岩波ブックレット1冊全体を取り上げた。しかし1回の授業でそれを全員が読了して検討作業を行なうことは不可能なので、全62ページのブックレットを数ページずつに分割して各班で検討作業を行なわせた（資料全文は全員に配付）。

学力低下論を批判的に検証する本格的作業は、低下論者たちが挙げる証拠に直接あたって事実関係や論証の妥当性を吟味することを不可欠とする。しかし教職科目の講義形式授業でそこまで行なうことは様々な意味で不可能である。だから、批判的意識を持つ契機となることを期待して上記の最低限の作業を行なわせたわけだが、その結果は必ずしも十分とは言えなかった。

自分たちが世代としてひとまとめにされて、「ゆとり教育」の申し子として揶揄的に取り上げられることに対しては、不満、批判、怒りを持つ学生も多いが、「『ゆとり教育』のせいで学力が低下した」という言説に対しては、十分な検討なしに受け入れてしまう学生もまた多い。

筆者の「ゆとり教育」言説批判を学生に押し付けるのではなく、しかしながら「受けた教育のせいでこうなった」というような機械的な自己形成論を容認してよいのかという問題提起を、これから学生に対して投げかけていきたい。

## 〔補論〕日本数学会学力調査の件

日本数学会は2012年2月21日に「『大学生数学基本調査』に基づく数学教育への提言」を発表した。その内容について検討することは本稿の課題ではないが、筆者は上記提言が発表された2012年2月24日午後7時のNHKラジオニュースで、学力低下は「ゆとり教育」のせいと報じているのを聞いた。

「日本数学会『大学生数学基本調査』に関する報告書(FAQ)」([http://mathsoc.jp/comm/kyoiku/chousa2011/FAQ2\\_21.pdf](http://mathsoc.jp/comm/kyoiku/chousa2011/FAQ2_21.pdf))には、以下のように述べられている。

「A13. この調査を受けた大学生は、いわゆる『ゆとり世代』です。小学校と中学校は平成10年12月告示、高等学校は平成11年3月告示の学習指導要領で学んだ世代です。」

「ゆとり教育」「ゆとり世代」についてそれ以上の言及はないが、文脈上は調査報告に示された学力の低さは「ゆとり教育」の結果であるという主張であると読める。マスコミもそのように解釈して報道しており、NHKオンラインでは以下のように論評されている。

「日本数学会では、調査を受けた大学生はいわゆる『ゆとり教育』世代で、学ぶ内容と時間が少なかったことや、学力試験のある一般入試を経ている学生は半数にすぎないことが、数学力低下の背景にあると分析しています。」(<http://mathsoc.jp/comm/kyoiku/chousa2011/>)

このように、いわゆる「ゆとり教育」が「学力が低下した、学力の低い世代を生み出した」とする言説が依然として振りまかれている。こうした主張はいわゆる「ゆとり世代」が学校教育を通過して行くにつれて次第に薄れていくであろうが、しかしその後も「世代論」として（かつての「共通一次世代」言説のように）生き延びていく可能性もある。

筆者は、客観的データを基礎にして提示されている学力の（低い）実態について、数学历力の専門家の意見に耳を傾けることにやぶさかではないが、そうした学力実態の主要な原因を「ゆとり教育」と特徴付けられる2000年代初頭の教育課程に帰することの是非については、様々な角度からの慎重な検討が必要であると考えます。

いわゆる「ゆとり世代」は今しばらく大学を通過し続ける。彼ら当事者たちとともに、「受けてきた教育によって学力が低下した」という世代の特徴は本当に存在するのか？」と今後も問いつづけていきたい。